
スタンレーに響く

徳次郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

スタンレーに響く

【Zコード】

Z3926E

【作者名】

徳次郎

【あらすじ】

第一次世界大戦の南海諸島一帯は、海に空に陸に……目まぐるしい戦場と化しました。最戦線へ向う私に彼女は言いました。「生きて帰つて来てください」それは、時代背景として非国民的発言でした……最戦線の蒼穹を飛んだ海軍飛行兵は何を想うのか。

1・蒼穹へ（前書き）

歴史のジャンルでいいのか迷ったのですが…
実際の歴史上の出来事が背景として登場しますが、時系列は若干改
造されていますのでご了承ください。
戦場ロマンとしてお読みいただければ幸いです。

1・蒼穹へ

白いカーテンを風がふわりと揺らすたびに窓の外に広がる蒼い虚空が光を放ち、私の想い出をくすぐるのです。

テッペンだけが僅かに窓から覗く庭木は、雨上がりの涼風が通り過ぎる度に青葉のざざめきを微かに放っていました。

ポートモレスビーの風に吹かれ、蒼天へ消えるあの頃の想いのように。

1・蒼穹へ

絵の具のような蒼に染まる蒼穹^{そら}は、淡く滲んで遠くへ霞む。

光のグラデーションが、地の果てに続く大氣の蒼を輝かせるので

しょう。

昭和十三年、冬の訪れを感じる高い蒼穹が広がっていました。

私はその頃、霞ヶ浦にあつた航空隊で日本海軍飛行練習生として、教官に怒鳴られながら毎日空を飛ぶ日々を送っていました。

確か……海軍少年航空兵の募集を見て応募したら落ちてしまい、翌年になつて一般海軍志願兵の応募に合格したと思います。

最初は水兵として戦艦に乗せられて、来る日も来る日も下士官にお尻を棒切れで叩かれました。

いつたい何の為に志願したのかわかりません。

私は飛行機乗りになりたかったのです。

ましてや、下士官の憂き晴らしの道具になる為ではありません。

水兵になつて一年後、上官に無理に勧められた砲術学校の受験に

合格してしまい、私は横須賀の砲術学校へ入学しました。

勉強は好きでした。

毎日船の上でお尻を叩かれているのに比べれば、私にとつて快いものでした。

しかしそれがいけなかつた……

私は思いの外好成績だつた為、その後砲術分隊に入れられてしまいました。

来る日も来る日も砲弾を運ぶ日々。

砲術学校で好成績だつた私は最初、砲撃手を任せていたのですが、飛行隊の希望を臭わせている事で上官の激情に触れ、船底に在る砲弾庫任務を命じられていました。

砲術を蔑ろにしていると映つてもしかた在りませんでした。

その頃の戦争とは、戦艦が征するものと誰もが思つていたのです。それでも私は大砲より飛行機が好きでした。

ただ攻撃する為の道具に比べれば、飛行機は明らかに別の用途を持つた機械なのです。

平和な時代の晩には、多くの人々が娯楽で蒼穹を飛べる事を私は信じていました。

半年ほどした頃、太平洋に演習で出た時の事です。

水偵が飛んでいるのを甲板の隅から見ました。私の乗る船から飛び立つたものです。

フロートを着けた水上偵察機は、青空を悠々と飛んでいました。軽やかなプロペラの音が、虚空と海原に響き渡ります。

私は持ち場も忘れて甲板へ上がり、ただ空を仰いでいました。

翌日、私は上官に願書を出しました。

もちろん、航空隊の操縦練習生の願書です。

一般水兵からでも操縦練習生に志願できる事は知っていました。

だから私はこつそり勉強を続けていたのです。

「白土、貴様は大ばか者だ」

上官は私を罵りました。しかし私はめげませんでした。

願書を出して一年後、私はついに霞ヶ浦の操縦練習生を受験しました。

した。

試験は三次まで在り、三次試験は実際に教官と蒼穹そらへ出ました。私は向いていました。

蒼穹は広く、信念意外には何者にも縛られない世界が広がっていました。

乾いた冷たい空気は機体に切り裂かれて後へ尾を引きます。

無事試験に合格した私は、戦艦を降りて入学を許されました。

今は無きスバルタ教育一本の教えは、確かに辛い事もありましたが、蒼穹へ出れば全てはチャラになりました。

さすがに飛行中は教官も後頭を叩いてきたりしません。

飛んでいる間も怒鳴り声は終始轟き、声を張り上げて指示に応えたのですが、無我夢中というよりは純粹に蒼穹を堪能していました。空の蒼は私を包み込んで、それは何者かと戦つ為の訓練で在る事を忘れさせてくれました。

入校試験の三次試験で教官と同乗飛行した時、私は初めてにも関わらず「どこかで経験があるのか?」と教官に問われました。

「ありません。初めてです」と正直に答えました。

私は最初から飛行機と相性が良かつたのです。

計器を見落として怒鳴られる事はしばしばでしたが、当時の飛行機は計器よりも目視と感覚が前提です。比較的好成績で、幾つもの閑門を通り抜けました。

そんな時、私は運動場に在る登り棒から落ちて足を骨折してしまつたのです。

中間練習機教程を卒業して、専修機を決められた日でした。

「飛行気乗りが地上で怪我をするとは何事か! ばかもの!」

教官に散々怒鳴られた拳句、海軍病院へ送られ入院しました。

我ながら、阿保だと思いました。

細い鉄パイプでできた粗雑なベッドが大部屋に並んでいる殺風景な病室で、私は毎日焦っていました。

初めて焦りを感じました。

同期の連中は専修機教程を開始したら、あと二ヶ月で全教程を卒業し、部隊配属されて飛行機を任される。

落第するのだろうか、それともクビだろうかと、焦燥感だけが私を襲いました。

「脚、傷みますか？」

入院3日目。そう声をかけてきたのは、その軍病院に当時一人だけいた女性看護師の一人でした。

「いえ、特に痛みはないです」

「そうですか……何時も俯いているので傷むのかと」

彼女は優しく笑いました。

頬から顎までの緩やかなカーブは穏やかで、桃色の唇は自分の中のとは全く異質の物でした。

東京出身という彼女は、白衣姿もどこか垢抜けていました。

「何時も俯いていますか？」

私は入院した初日以来、蒼穹を見ていなかつた。見るのが怖かつたのです。

同期の連中が今日もこの蒼穹を駆け巡るのかと思うと、置いてきぼりを喰らつた自分を不甲斐無く思い、怖くなるのです。

「空は、嫌いですか？」

「まさか。私は飛行機乗りです」

私はキッパリと答えました。

「そうですか」

彼女は再び優しい笑みを私に向けてくれました。

「そうです。蒼穹は私の全てなのです。でも今は飛べません。私は地上で怪我をしていました。土の上で蹴躡く一ワトリと一緒に

す

彼女は僅かに吹き出して「す、すみません」
頬を真っ赤にして私に頭を下げました。

「いえ、それだけ不甲斐無いという事です」

私は彼女の罪を許す意味で、無理に笑顔を作りました。
彼女が吹き出して笑った事を罪だとは思いませんが、彼女がそう
思つているようだったので私が許すしかなかったのです。

「空を飛ぶのって、どんな気持ちですか？」

彼女は再び柔らかそうな白い頬をふわりと持ち上げて優しい笑み
を零しました。

「最高です」

私は短く答えました。

地に足の着いていない完全なる浮遊感とエンジンの力で大気を切
り裂く爽快感、旋回の時にかかる重力加速度は最高の一言で充分な
のです。

「最高……ですか」

何だか彼女の微笑みは、私の気を大変楽にさせてくれました。安
らぐところは、こういう事なのかと思いました。

操縦学校の仲間と笑い合うのとは違う何かが、心のなかに沁み込
んでくるのです。

太陽の陽を受けて煌く霞ヶ浦の水面みなもを上空から見渡したような、
爽快な想いが込み上げてくるのでした。

次の日から、私は窓から外を眺めるようになりました。

敷地の楓と桜が見事に葉を紅く染めていました。銀杏木は半分葉
を落としていましたが、何故か寂しげには見えません。

紅葉が陽射しに照らされて、地面を赤々と照らし出します。

主治医に彼女の名前を訊きました。

私に暖かな安らぎをくれた、あの看護婦です。彼女は内田昌美さ
んといいました。

しかし私は彼女の名前は呼びませんでした。

内田昌美さん

呼ぶような場面が無かつたからなのですが、別に呼びたい為に訊いたのではなく、ただ彼女を知りたいだけだったのです。

明日になつたらギブスが取れるといつ日でした。

私は数日前から松葉杖をついて、中庭を散歩するようになつていました。

陽射しは穂のかに暖かく、深まる秋風は程よく冷たくて、私の焦りを少しだけぬぐってくれました。

楓の木から糸をたらした蓑虫みのむしが、ゆらゆらと風に揺られています。

その姿は、まるで私のようでした。

身動きできず、ただその場で風に身を任せただけ。

その頃の軍病院はそれほど混み合つていませんでした。

四六時中患者の出入りはありましたが、常に空きベッドがありました。大日本帝国軍が優勢な時代であった事を物語ついていたのだと思います。

「お散歩ですか？ 白土さん」

昌美さんが病棟の端で、洗濯物のシーツや手ぬぐいを山ほど干していました。

陽を照り返した白い手ぬぐいの群れは、彼女を眩く浮かび上がらせていました。

「ええ、両の足で歩けるのも、もう直です」

「でも、まだリハビリがありますよ」

昌美さんの看護帽から僅かに見える後れ毛が、陽に照らされて風で揺れていました。

「そうですね」

私ははにかみ、伸びかけた自分の坊主頭を片手で撫でました。考えてみれば、私も彼女とそつ変わらぬ年なのでした。いや、女学校を出たての昌美さんは十七歳。私はまだ十六歳だったのです。

「リハビリ、頑張りましょうね」

「はい、もちろんです」

次の日ギブスを外した私は、驚異的にリハビリをこなしました。一日も早く学校へ帰りたい気持ちがありました。

仲間はあと一ヶ月で卒業です。

私は戻れるのだろうか。卒業できるのだろうか。

急行列車の途中で転げ落ちてしまつた私は、目的地へ辿り着けるでしょうか……

不安と恐怖を拭い払つよう、無我夢中で歩行訓練をしました。固定していた足首は、動かそうとすると痛みを伴いました。

「頑張つて、少しの辛抱です」

昌美さんは私の足を掴んで、少しづつ足首を動かしてくれました。彼女のひんやりとした手に触れられると、やせ我慢が出来ました。私は無理に笑顔を浮かべると、眉間にシワを寄せたまま

「大丈夫です、思い切りやつてください」

「思い切りはダメですよ。飛行機つて、足首も使うのでしょうか？」

「ええ、まあ」

私は再びやせ我慢の笑みを滑稽に浮かべました。

一週間後、無事私は退院し、操縦訓練学校に戻りました。

昌美さんは、早朝に出かける私を外まで送り「お元氣で」と言いました。

もちろんです。と心の中で応えると、私は「お世話になりました」と応えました。

一人の口から微かに白い息が零れて、絡み合つように宙に消えます。

朝靄が微かに煙る、寒い朝でした。

私はしこたま説教を受けた後、無事に専修機を決められて訓練を再開しました。

九〇式艦上戦闘機の操縦を学んだ私は、みんなより半月遅れで卒業する事が出来ました。

「白土、ささまは骨折など下らん目に遭わなければ、おそらく首席だつたぞ」

宗方教官は卒業の日、怒つているのか笑つてているのかよく解らない顔でそう言つと、私の肩を強く叩いたのですが、それまでで一番痛く感じたのは何故なのか今でも判りません。

彼なりの激励が、私の心の芯まで届いたせいなのでしょうか……

その後隊門を出て、私は晴れて任務地へ出発したのでした。

高い空は蒼く、陽射しが輝く大氣の向こうに、いわし雲さざなみが漣のよう浮かんでいました。

年が明けた昭和十四年の夏、九州佐伯航空隊で三ヶ月の戦闘機操縦訓練を終えた私は、高雄航空隊に配属になり、戦友たち六人と共に中国大陸へ渡りました。

当時十二航空隊と十四航空隊の一隊だけしか大陸にはなくて、増援部隊として編成されました。

当時はまだゼロ戦はなく、九六式艦上戦闘機に搭乗しました。初陣は高ぶる緊張の中何も出来ないまま作戦終了し、たつぱりと銃弾からを残したまま帰還しました。

空の蔵層タンクまで持ち帰つてしまつたくらいです。

中國大陸は一年ほどで基地を後にしました。

九州の佐伯基地へ戻つた私は、一年間そこで過ぎました。新鋭戦闘機である零式艦上戦闘機 ゼロ戦が作戦の為出撃してゆく姿を、歯痒く思いながら何度も見送りました。

その代わり試験飛行を何度も任せられ、ゼロ戦の航続距離のテスト任務などもこなしました。

その後再び台湾へ配属され、私はこの時、念願のゼロ戦搭乗員になりました。

幾つもの作戦に参加して、敵機を何機撃墜したかわかりません。

それは幾人もの命を奪つた証なのです。

私はそれを数えようとは思いませんでした。

大陸近辺で行われる作戦では、当時ゼロ戦は無敵だつたのです。

誰もが英雄でした。愛機がゼロ戦というだけで。

一年ほどの戦闘で、気付けば私は一空曹から一飛曹に昇進していました。

そしてその年の冬、真珠湾奇襲作戦が実行されて日米開戦へと突入するのです。

私は台湾の航空隊基地でその事実を知り、その一日後にルソン島基地攻撃作戦に参加しました。

水平線には大きな入道雲が、縁口で売られる綿菓子のように立ち昇っていました。

3・負傷

昭和十八年夏。

バリ島に進出した私たちの部隊は、好戦的に勢力を広げてゆきました。

その日はラマン航空基地を攻撃目標に、一八機のゼロ戦が飛び立ちました。

上空に黒い点が見えたのは、攻撃目標手前五十キロのあたりで、私たちゼロ戦部隊は散開して迎撃体制を取りました。

相手はP 36 カーチスです。

直ぐに迫ってきて、向こうは正面から機銃掃射をしてきました。弾道に入らないように機首を上げ、機体をバンクさせます。

一瞬ですれ違つた一機を標的に、私は操縦桿を倒して翼を立てたまま右旋回しました。

向こうも右旋回します。

しかし、ゼロ戦の方が旋回が速いらしく、P 36の背中を押む事が出来ました。

上手い具合に照準の真ん中に入つたので、私は7・7ミリと20ミリ機関銃を同時に発射しました。

操縦桿と機体がダダダダダと振動して、滑るような光の弾道が緩く弧を描きます。

パツと火炎と黒炎が出て、敵機はグルグルと回転しました。

機体をやや降下させて再び機銃を浴びせると、標的は火を噴いて羽根が吹き飛びました。

私は機首を上げて上昇旋回しながら、次の標的を探します。

三時の方向に敵機を見定めて、それに向つて旋回しました。

その時、後から何かが飛んでくるのが見えたのです。

溶けかけた飴玉のような光が、素早く風防の横を飛んでゆきます。

振り返ると後ろに、一機のP 36がへばりついていました。

私は左のフットバーを思い切り踏み込んで、操縦桿を左に倒し、そして引き上げます。

機体をロールさせて主翼を立てて上昇する行為が、水平位置から見た旋回になるのです。

単発エンジンのプロペラ機はプロペラの回転の影響を受ける為、その回転方向への旋回が一番速いのです。

そしてやや降下する旋回がさらに速度を上げます。だから空戦では急旋回する度に、次第に高度を落とすのが常になります。

P-36は旋回性能がそれほどではないと思いました。しかし、なかなか後から離れません。

機体の性能発揮は操縦者ありきと言つ事でしょう。

再び発光弾の軌道がこちらに飛んできます。機銃の弾丸は大抵の場合、鉄鋼弾、炸裂弾、発光弾の順に装填されています。

今度は右のフットバーを踏み込んで機体をスライドさせました。少し上後方からの攻撃に対して、この回避行動が有効なことを私は知っていました。機体が真横にスライドする回避運動は、相手の目視の錯覚を誘発させるのです。

主翼の先を、スルスルと光の粒が飛んでゆきます。

私は再び降下旋回をして、何とか敵機を振り切ろうとしました。相手が降下したのを見て、今度は急上昇です。操縦桿を力いっぱい引きました。

このまま小さいループを描ければ、敵機の後ろ上方に出る事が出来ます。

重力加速度が身体をシートにめり込ませます。

私が顎を突き出して上を見ると、既に地上に茂る艶やかな熱帯雨林の森が見えました。機体が逆さになつているのです。

その先にP-36が見えました。上昇しきれずに、旋回を始めたところでした。

私は機体を水平に戻して7.7ミリ機銃を一秒間打ち込みます。照準には入つていませんが、権勢です。

左へ逃げるP-36を追つて、私の闘志が燃え上がりました。
スロットルでブーストを上げます。

照準機の真ん中に入った敵機に向けて、今度は7・7ミリと20ミリ弾を同時に打ち込むと、尾翼の破片が飛んで、胴体は火炎に包まれました。

しかし、戦闘空域では息つく暇もありません。
その時、右後方から機体に衝撃が起きました。
何が起きたのかは、すぐに解りました。
再び敵機に狙われているのです。

後の風防が割れて身体に痛みを感じましたが、私は必死でフットバーを踏み込み操縦桿を倒してバンクを振ります。
高度はあまりありませんが、降下しながら旋回しました。高度は千メートルを切っていたと思います。

直ぐに逆向きにバンクを振り操縦桿を少し引き込みます。
降下速度の速いP-36が私の下に入りました、
一端距離をとろうとした時、味方機が私を狙っていたP-36を撃墜してくれました。

辺りを見渡せば圧勝でしたが、ゼロ戦も二機撃墜されました。
それでも、ゼロ戦二機の撃墜に対し、P-36は十機撃墜。残りの五機は離脱して消えました。

しかし、そのままラマン航空基地を襲撃します。離脱したP-36の残り五機には出会いませんでした。
降下して森の上スレスレに敵地へ侵入すると、航空基地の滑走路にはB-17が三機見えました。

対空砲火はほとんどありませんでした。
低空飛行のまま交代で機銃掃射するとB-17は三機とも炎上し、司令塔も壊滅させると作戦終了です。

自分の攻撃で誰かの命が消えることは考えません。そんな事を考えていれば、自分がやられてしまします。
正直お国の為……などと言う意識はありませんでした。

戦果をあげることは、純粹に自分の成すべき事を遂げた達成感に他なりません。あとは、同僚を死なせない為、自分が飛び続ける為に努力するしかないのです。

基地に戻つてから気付いたのですが、私の脇腹を弾がカスつていました。右肩は弾丸が貫通して、飛行服の上着は血で真っ黒でした。

南国の木は青々と瑞々しく茂り、海の色は淡い水色でした。
バリ島にいた私の部隊は、航空隊ジャワ島集結の命を受けて移動しました。

あつと言ひ間の進出でした。

ある時米軍の輸送機が低空で接近し、そのまま着陸態勢に入りました。

みんなはまさかの行動に度肝を抜かれ慌てふためきました。

「打て打て！」誰かが叫んでいました。

みな、あまりの突然で大胆な出来事に攻撃を忘れていたのです。

陸軍部隊が機銃掃射を開始しました。

輸送機の慌てるパイロットの姿が目に浮かびます。

彼らは、あまりに速かつた日本軍のジャワ島進出に気付かなかつたのです。

何かの都合で緊急に着陸せざるおえない事態だったのかもしれません。

まだ米軍基地があると思って、悠々と着陸態勢に入つたように見えました。

いきなり機銃を浴びせられて気付いた輸送機は、慌ててタッチアンドゴー宜しくと、機首を上げてエンジンを唸らせました。

それはあつと言ひ間の出来事で、機影は瞬く間に小さくなつて行きました。

滑走路の真ん中に車輪をひとつ落として……

「マヌケな奴もいるもんだ」と誰かが笑いました。

ゼロ戦航空部隊は何も出来ずにただその様子を、口をあんぐりと開けたまま見届けただけでした。

私はと言えば、先週の作戦で負傷し、肩と腰に包帯をグルグルと巻いたまま、静養を強いられていました。

南国の女性たちは肌の黒い魅力的な笑顔を燈す。縁に近い黒髪は、満ち溢れた生命力を感じさせるほどに力強く輝くのです。

私はそんな色黒の彼女たちを見ていると、何故か対照的な白い女性の笑顔を思い出すのでした。

内田昌美さん……ふと思い出しました。

航空部隊も増え侵攻範囲も大きくなつた今、本土の病院はどのような状態なのか想像もつきません。

あののんびりとした陽射しの下で過ごした日々の中で嗅いだ消毒液の匂いは、硝煙にまみれた戦場とは対照的なのです。

何もかもが対照的な世界の中で、久しぶりに嗅いだ消毒液の匂いが彼女を思い出させたのかもしれません。

彼女の冷たい手のひらの感触が蘇えり、私の脚にムズムズと感覚を伝えます。

そして私は、再び本土へ帰る事になるのでした。

「白土幸夫二空曹は、内地勤務を命ずる」

私は内地へ戻つて、軍病院で治療する事になつたようです。他にも内地を離れて戦線生活が長い連中は、本土へ戻る事になりました。半分は内地、そして残り半分は他の戦地へ行くのです。

ラバウル……これから最戦線基地になるであろう、ラバウルへ向う戦友に手を振つて、私は同僚たちと輸送貨物船に乗り込みました。桟橋から仲間が手を振つてくれました。

彼らが向うラバウルを私は知りませんでした。

その中で仲の良かつた十数人は、一度と会つ事はありませんでした。

3・負傷（後書き）

戦時の話しあは、事実のエピソードを元に構成していますので、史実の著書などでお目にかかった事柄が含まれている場合がありますが、全てフィクションとして取り込んでおります事をご了承下さい。

私が送られたところは、横須賀にある海軍病院でした。

やはり戦線が広がる中で、負傷兵も確実に増えていました。

それでも、負傷して戻るくらいなら死んで戦果を成し遂げよ。という体勢があつたので、内地の病院へ送られてくる者はまだ少なかつたと思います。

特に、私たち飛行機乗りは落下傘を背負いません。もちろん、装備としての非常用落下傘は存在するのですが、機体を少しでも軽くする為に機内に持ち込まないのです。

米軍の飛行機は墜落する直前にパイロットが飛び降りたりして落下傘を開きますが、日本軍の飛行機乗りは常に愛機と命を共有しているのです。

だから、撃墜されたらほとんどが病院へは来ないし、遺体すら発見されません。

帰還しなければ、戦死と言う事なのです。

私の右肩は化膿していたらしく、腕全体が腫れていきました。帰つてこなければ右腕を失っていたかもしないと言われ、ゾッとした。

赤道に近い南国から帰還した本土はもう直ぐ冬でした。
横須賀の海はバリやジャワのような淡い瑠璃色に輝いてはいなくて、黒々と荒涼に濃い藍色でした。

今回私は幸い足が元気なので、暇を持て余しては大きな敷地を散歩ばかりしていました。

「白土、白土だよな」

声を掛けられて振り返ると、斎藤雄一郎がいました。

彼は九州から最初に大陸へ渡った時に一緒で、一年ほど戦場を共にした仲です。

「おお、斎藤。どうしてここに?」

そんな事を言つまでも無く、彼は足にギブスを巻いていました。

「運よく助かつてな」

斎藤はギブスの上から自分の脚をコツコツ叩いて笑いました。

横須賀の病院ではほとんじが看護婦でした。男子の看護師は戦地へ出たようです。私と同世代の年頃から母親の世代まで様々でした。同世代の女性と向き合つのは快かつたのですが、とにかく注射が下手でした。

それでも経験を積んで上達する工程を知っている私は、できるだけ痛い顔などを見せないように努めました。

その日は朝から冷たい雨が降っていました。

曇った窓ガラスに伝う霧は今にも凍りつきそうで、外の景色を白く霞ませていました。

上空に高く上ると、飛行機乗りは頭七割とよく言われます。酸素が薄い為に思考力が30%ほど低下するのです。

窓ガラスの外に煙る景色を眺めていると、その緩く滲む様がまるで頭七割になつた気持ちになるのでした。

そして、空の空気を思い出します。

冷たく透明に澄んで、しかし火炎と硝煙の残臭が漂つ蒼穹の匂い。そら

「白土さん？」

聞き覚えのある声だと思いました。

私はゆつくりと振り返り「ああ」と、なんと聞の抜けた声を出します。

薄暗い部屋に、僅かな光源の光を全て引き寄せたような白く輝く笑顔がありました。薄紅の唇が、白い歯を覗かせています。

「昌美さん……」

私は思わず名前を呼んでいました。

意識せずに出て言葉です。おやらく意識したら発しなかつたでしょ。

私の声を聞いて、昌美さんは頬を微かに紅くしたよつて見えました。

「名前、知つてらしたのですか？」

「は？」

「私の名前です」

「ああ、ええ。知つていました」

ちょっと間の抜けた再会でした。

忘れていたと思っていたけれど、忘れないなかつたのです。

内田昌美という名前を、私は無意識に口ずさむほど心の浅い場所に残して生活していたのでしょうか……？

「今度は戦地で？」

昌美さんは心配そうに眉を潜めます。

「ええ、敵機の流れ弾を受けてしまいました」

私はいささか陽気に答えました。

心配そうに曇つた彼女の顔が、たまらなく気の毒に思つてしまつたのです。

本当は流れ弾ではなくて、狙われたのですがそんな具体的な事はどうでもいいのです。

「そうですか……」

「もう、大分いいんです」

私は右肩を無理に動かして見せました。

関節の外側がじくりと傷みましたが、昌美さんはゆるく笑つてくれたのでそれでいいと思いました。

「じゃあ、また」

彼女は私の血圧を測り終えると、そつと二つの隣のベッドへ行きました。

端のベッドまで血圧の測りを終えると、昌美さんは私に一瞬だけ視線をくれて、病室を出てゆきました。

私は息をついて曇りガラスを手で拭つと、妙にスッキリとした意識で再び外を眺めました。

雨に煙る景色はフィルターがかかったように枯葉の茂った木や草をしつとりと映し出して、冷たく潤っていました。

私の腕の状態は私が思っていた以上に悪かったようで、脇腹のキズが快復しても右腕は吊つたままでした。

斎藤の脚も治り、明日横須賀の部隊に戻ると言っていたので、まきストーブの横で一緒に甘酒を飲みました。

「俺も早く戻りたい」

私は早く蒼穹へ上がりたかったのです。

一度飛んだ人間は、地上に長く留まる事が出来ないのかもしれません。それは、船乗りが陸で暮らせないのとよく似ている気がします。

斎藤を見送った日の朝、ゼロ戦の編隊が頭上を優美に通り過ぎました。横須賀飛行場に降り立つ部隊なのでしょう。

私は澄み渡る空を仰いで、その姿を田で追いました。早く飛びたい。

オイルと硝煙の匂いに、何故か思いを馳せるのです。

この日、関東地方にも一部地域で雪が舞つたそうです。横須賀はほとんど雪は降りませんが、凍えそうなほど凍てつく寒さが微かに風の漏れこむ窓際に渦を撒き、吹き溜まりとなつてカタカタ鳴つていました。

寒空は異様に高く、遠くにイワシ雲が見えます。

私が霞ヶ浦の操縦学校を卒業した日も、同じような空が見えました。同じぐらい寒かつたはずなのに、あの時の寒さは清々しさに変わつて私を包んでいました。

戦闘機に乘る志が、闘志を震わせていました。

ここはそんな闘志が無用の場所です。

闘志が無用になると、寒さというのは増すのでしょうか……

「白土さん」

昌美さんが声をかけてきました。先週から私の担当になつたらしいのです。

朝の洗濯の時間や、午後の取り込みの時間など、私の散歩の時間がちょうど重なる為に最近よく話をします。

彼女は調布に生まれ育ち、その後世田谷へ移り住んで日白女学院に通つたそうです。

その後看護学校へ入つたそうですが、一年も経たずに病院への要請があり、学生のほとんどは軍病院へ散らばつたそうです。

最初に就任したのが、霞ヶ浦近くの海軍病院なのでしょう。

私は学年でいうと、二つ上だという事がわかりました。

昌美さんは親の勧めで看護学校へ入つたそうです。お国のために女が出来る最良の仕事だと、両親は言つたそうですが彼女自身はそうでもないようでした。

ただ、怪我をした誰かの役に立てるのは希有な事だと言いました。

眠れない夜、私はこつそり庭へ出て夜空を見上げました。
澄み渡る南の宙空には、オリオン大星雲が光の翼を広げていました。

航空目視に慣れた並外れた視力が、1300光年先の翼をも捉えるのでしょうか。

月はありませんでしたが、星影が注ぐそう暗くない夜でした。少し離れた所で人の気配がしたので、私は静かに歩いて、その人影に近づきます。

「あら、眠れないのですか？」

昌美さんが私の気配に気付いて振り返り、星影に照らされた笑顔を向けました。

「ええ、たまにあるのです」

私は伸びかけの坊主頭を左手でなで上げると

「昌美さんもですか？」

「いえ、私は今夜は当直なので」

当直が当直じゃないかは夜寝るか寝ないかの違いで、医師や看護師たちも同じ敷地に寝泊りしているのだが……

「今いる方達はみなさん静かなので、暇な時はこうして宙空を見に外へ出ます」

「そうですか」

私たちは夜天光に照らされて、暫しの星降る時間を共有しました。彼女は立派な看護婦になりたいと言つていました。一人でも多くの人の助けになりたいと。

私はと言えば、先の見えない……永遠に閉ざされるかもしない将来を思い、それをひた隠しにして彼女の声に聞き入つていたのでした。

誰かの命を奪う自分に、自分の将来を語る資格があるのでしょうか……

星影を受けた大氣光は私たちの心にゆっくりと沁み込んで、一人

の違う境遇の壁をすり抜けるようにお互いを引き寄せたのかもしません。

「もう、大分皮膚が再生されましたね」

「一日後、私の右腕の包帯を替えながら、銃剣をチェックする昌美さんが言いました。

酷い化膿があつた為、大分皮膚再生が遅れたようです。

「そうですか」

私は静かに笑います。

静かに笑うなんていう表情は、ここへ来てから思い出しました。静かになんていう行為は、飛行機の操縦以外無縁で暮らしていましたから……

「この分だと、来週には退院出来るかもしません」

彼女はそう言って微笑んで……微かに眉を潜めて俯きました。

「治つたら、また戦地へ行くのですよね」

「はい。私は戦闘機乗りですから」

彼女の唇が、一瞬への字に歪み小さく震えました。でもそれはほんの一瞬の出来事で、昌美さんは再び視線を私に向けて笑います。

「そうですね」

「はい」

「私も、いつか空から地上を見てみたいですね」

彼女は窓の外へ静かに視線を向けます。

「見れますよ。何れ、旅客機がバンバン飛ぶと思います」

その言葉で、彼女は再び私に視線を戻しました。

「旅客機？ですか？」

「普通の人が、旅行などの移動手段で乗る飛行機です」

「私も乗れるでしようか？」

「もちろん、乗れますよ」

「じゃあ、何時か一緒に……」

「は？」

「いえ、何でも在りません」

畠美さんは包帯を替え終わると、足早に他のベッドの所へ行つてしましました。

それから一週間もしないうちに、畠美さんが言つた通り私は退院することになりました。

あの日以来、彼女は黙々と仕事をこなすだけで、私との会話はほとんどありませんでした。洗濯場へ行くと、手伝いの娘が一緒で声は掛けられませんでした。

たおやかな陽に照らされ、同僚と涼しげに笑う姿をそつと皿に止めるだけでした。

私はここで静かに笑うこと思い出した代わりに、何時の間にか硝煙の匂いを忘れてしました。

上空を行き交うゼロ戦の機影を見ても、心が逸らなくなりました。凍て雲が見下ろす空は、南海の湧き立つ空とは間逆で重苦しいものなのに、何故か暖かいのです。

寒空とは逆に、ここでの空気は優しいのです。

退院の朝、担当医に挨拶をして書類を貰いました。
少ない荷物をまとめていると、背中から声がしました。昌美さんが声をかけて來たのです。

一人で病棟の外れに在る物干しの横まで歩きました。

陽の当たらない板張りの通路は、何時もより寒々と感じました。
外は冬特有の低く眩しい陽射しが、凍て雲の隙間から細く注いでいます。

「退院したら何処へ？」

「横須賀の基地から佐世保へ。おそらくそこからラバウルへ行きます」

「ラバウル…………ですか」

彼女にはピンと来ない様子でした。私にさえ、ラバウルがどんな所なのか想像がつきません。

「はい。戦友が沢山そこにいます」

「暑いのでしようね」

彼女はそう言って、低い凍て雲を見上げました。

凍て雲が無縁の南国之地。

瑠璃色に輝く南海諸島の風は、硝煙と血に染まっているのかもしれません。

少しの間、空を見上げる昌美さんの姿を私は見ていました。
つるりとした白い頬に触れてみたいと思いました。

彼女は私の視線に気付くと、僅かに頬を紅くしました。そして、白衣のポケットに手を入れて何かを取り出したのです。

「これ……持つて行つてください」

彼女が差し出したのは山吹色をした手のひらの半分ほどのお守りでした。

「昨日、神社へ行つてもらつてきました」

「私に……ですか？」

-
はし

お守り袋は彼女の手作りで、私の名前が藍色の糸で縫いこまれていました。

「されば、昌美さんが？」

彼女は「クリ」と頷きました。

す。 すこし腰が痛いんだお守り袋は、揺るとチリチリンッと音を立てま

神社で頂いたので上

豊美さんは小さく俯いて「ダメなら鈴は捨ててください」と言います

したたかに脚が大きくなれば、

昌美さんは背が大きい方なのだろう。男としては背の小さい私と
目線が僅かしか違いませんでした。僅かだけ私が上ですが、見下ろ
すほどではないのです。

飛行気乗りは軽い方がいいからあまり気にした事はありませんが、

彼女は私のぶかぶかした病院着の腕の裾を引くと、病棟の影へゆ
つくりと引き込みました。

建物で光が遮られるのはひんやりとした場所で、黒土の冷たさを靴底に感じました。

昌美さんの瞳はしげ茶色の虹彩に包まれて、愁いに満ちた黒色に潤んでいました。

私の映りこんだ顔が彼女の瞳の中で小さく揺れ、その愁いの中に溶け込んでしまいそうでした。

「また……」彼女は言葉を呑み込みます。

私は沈黙して彼女の揺れる瞳を見ていました。

彼女の言いたい事が少しだけ僅かに汲み取れましたが確信は無く、確信はあってもここで確信にするわけにはいかず、私はただ沈黙し

ました。

薄紅の脣が微かに震えました。

彼女は何かを言いかけて再びそれを呑み込むと、ゆっくりと倒れこむように私に身を委ねました。

耳元に彼女の静かな息がかかります。

「どうか、無事に帰つて来て下さい……」

無事に帰つてきて。などと言つ言葉は、愛国心に反する時代でした。お国の為に死んで来いと送り出すのが当たり前の時代でした。いくらそうは思つていなくても……

彼女には小さい弟がいます。父親は米問屋を営み、今は軍の物資配給に協力しているそうです。

戦場に家族を送り出した事のない彼女には、愛国心といつ片寄つた冷たい鋼鉄の精神は関係ないのかもしません。

私は「はい」とは言いませんでした。

耳に熱いものが滴るのを感じました。

彼女の頬を伝つた泪だと判りました。

「あなたはあなたの命を守る為に引き金を引いてください。その分私はここで誰かの命を救います」

「有難う御座います」

私はそう言って、彼女の肩を抱きました。

背はそう変わらないのに折れそうなほどか細くて、卵にでも触れるようにそつと大事に抱きました。

私が引き金を引く事で彼女に開けた未来をもたらす事ができるのなら、私は再び戦場の蒼穹を飛ぶでしょう。

消えた鬪争心が再び芽生える事がなくとも。

綿毛のやうな白いモノが空からヒラヒラと舞つてきて二人の頭に触れたのは、例年よりも一週間早い初雪だそうです。

彼女が肩を震わせ頭を動かして私の身体を揺すつたので、手に持つたお守りがチリリン……と悲しい音を立てました。

7・祈り

人は自分の居場所によって、自分の価値を見い出せるのでしょうか。

欠片もなくなってしまったように感じた闘志は私の中で燃つてゐるだけで、操縦桿を握れば再びそれが身体の奥底から沸き起こりました。

オイルと硝煙の匂いを懐かしく思いました。

私は長崎の佐世保から空母春日丸に乗員して太平洋へ出ると、一路マニラへ向いました。

ゼロ戦の機体をマニラ経由でラ工基地に運ぶ為です。そこからさらり、ラバウルへ飛ぶのです。

途中敵の襲撃を一度受けてその度にジグザグ航行。

飛行機乗りが船で死んだのではカツコが着かないと、私は焦りと恐怖で閉ざされた船室で強張っていました。

おそらく一緒に乗り合わせた仲間も同じ気持ちだったと思います。一度目の攻撃では、ゼロ戦で艦を離れて応戦、そのままマニラへ飛びました。

船室で強張っていた飛行機乗りは、無事蒼穹へ放たれたのです。

結局私は一年近くマニラに留まつた後、ラ工に向いました。

私がラバウル飛行場へ移動になつたのは昭和十八年の夏も終わる九月でしたが、四季の遅ろう日本と違つて、その季節感はまったく感じませんでした。

ラバウルの指令基地は荒野に立つ掘つ建て小屋そのものでした。滑走路は酷く荒れて、空爆の穴を埋めて修復はしているものの、それでもここそここの外れに穴ぼこが残つていました。

離着陸する度に砂煙が酷くて、後発で出る機は勘で滑走するしかありませんでした。

ポートモレスピーから来るB-17の爆撃が頻繁に行われ、制空

権を奪われつつありました。

この頃には定期的に行われていたガダルカダル島への出撃もなくなり、飛行場の死守が任務のようなものでした。

兵舎の隅に薄汚れた、けれども人懐っこい犬が一匹飼われていました。

数年前までいた精銳部隊は影を潜め、僅かに残った古巣パイロットが先陣を切つて士気に励んでいました。

去年運び込んだゼロ戦二十機は十機しか残存しておらず、私と一緒に飛んできた五機とやたらと古臭い十一型を含めても全部で三十機足らずでした。

しかし、十一型の半分は飛ぶ事はできません。
私は奇妙な落胆を抱いて空を仰きました。

蒼い空は、薄つすらと灰色を混ぜたように淡く輝いて、何故かふと内田昌美さんを思つのでした。

彼女は今も誰かを救つてているのだろうか。

私が殺したぶんの人間の命を救つてくれているのだろうか。
彼女が横須賀の病院で言つた事を思い出します。

「両親に進められて始めた看護婦の道ですが、今はこの時代の中で人を救える事を希有だと感じています」

落ち葉が陽射しで乾燥し、踏みしめるとパリパリと音を立てて砕けました。

「私が誰かの命を奪つてしまふ、あなたが救つてください」

「判りました。でも……あなたはどうかご無事で」

彼女の黒髪は消毒液の匂いが染み付いていましたが、今の私にとってはあの消毒液の匂いこそが彼女の思い出なのです。

兵舎の隅に陣取つていた犬が、ワンと鳴きました。

私は挨拶代わりに自分の水筒から水を分けて与えると、尾を振つてそれを飲みました。

この寂れた荒野のような場所で、一番遅しい姿に見えました。

緊張と緩みの交錯する日々が続きました。

頻繁に飛んでくるB-17は、まるで子供が遊んでいるような粗雑な爆撃を繰り返しました。

米軍の爆撃は元々粗雑なのですが、それがいかにも適当だったのです。かろうじで土の場所を狙っている感はありました。低空爆撃にも関わらず時には雑木林に爆弾を投下したりしました。とにかく手持ちの爆弾を全部消化して、とりあえずノルマを達成しようという感じです。

そんなに余っているなら、少し分けてくれればいいのに。私たちはその度に蒼穹へ上がって応戦しますが、飛行場が無傷な事はありませんでした。

物資が不足し始めると、7.7ミリ弾だけの武装で飛び立つので、護衛機をなかなか追い払う事もはばかりません。

20ミリ機関銃と違つて、ヘルキャットやワイルドキャットの防弾板を7.7ミリだけで打ち抜くのはただ事ではありませんでした。鉄鋼弾を何度も打ち込んで、ようやく黒煙を吹き上げるのです。私はその頃から風防を狙うようになりました。

以前は意識的に、いや無意識のうちに胴体や翼、エンジンを狙っていました。操縦席に見える人間に向けて弾丸を直接撃ち込むことが出来なかたのです。

人を殺す事には変わりないはずなのに、その命を奪うことに変わりないはずなのに、飛行機を落とせても人間を撃つ行為は私の倫理が妨げとなつて出来ませんでした。

しかしそんな事は言つてられなくなつたのです。

米軍機の防弾板は強化され、真後ろから7.7ミリ弾を打ち込んで平気で旋回を繰り返すのです。

私は出来るだけ斜め上方から風防に弾を撃ち込みました。

どうか昌美さんが彼の分、誰かの命を救ってくれますように。と、祈りながら。

時には吹き飛んだ風防ガラスに真っ赤な血が内側から飛び散ります。

接近戦が強いられる当時の空中戦ではパイロットの表情までもが見える事は、しばしばでした。

私は墜落する機体から飛び出した敵の落下傘を撃つた事がありません。

操縦者が助かれれば、再び戦場へ誰かの命を奪いに戻つて来ることは判っています。それでも、それが偽善と言われようとも、直接人を撃つ事はしませんでした。

しかし機体を落とせない以上、風防を狙うしかないのです。

放たれた弾丸の群れは死神の泪となつて、操縦者の魂に吸い込まれてゆきます。

私は祈りました。

彼女がこの彼の分の命を救いますよつい……

そして再び発射トリガーを引くのです。

8・ポートモレスビーに散る

昭和十九年九月。私がここへ来て一年が過ぎました。

相変わらずの空爆の最中^{さなか}、負傷兵は増えました。

丘の上に在る海軍病院は何時もイッパイでした。兵士が負傷するのに、犬は何故か無傷でした。

「タロウの傍にいれば、死はないのではいるだろうか」

そんな事を言つたのは、私より半年送れてここへ来た斎藤雄一郎でした。

初めての任務で一緒に大陸へ飛んだ斎藤は、私にとつて心強い友の一人でした。

「なら、ゼロ戦と一緒に乗せるか

「重くて落とされるぞ」

そんな冗談で笑うしか、自分たちを励ます術はありませんでした。補給物資は底をつき、ラ工基地から分けてもらひつことも難しくなつてきました。

この頃になるとサイパン諸島にも敵は振興して、一部に上陸を果たしたとも聞きました。

十月の終わりの事でした。

B-17の編隊を確認した私たちの部隊は、三日前にやつとの思いでラ工から調達した物資を出来るだけ詰め込んで、残りのゼロ戦全てを飛び立たせました。

仲間が飛び立つ中で、と言つてもその時点では飛べる機体は全部で十機でしたが、私の小隊も飛び立ちます。

私は飛曹長となり、二機の部下を連れていきました

川島は陽気で明るい男で、何故か何時も笑っていました。草加は少し神経質で眉間にシワを寄せるのが癖でしたが、その分慎重で頼

れる男でした。

私が来た三ヶ月後に斎藤と共にここへ飛んできた新人で、その中から生き残った彼らはある意味猛者と言えたかもしれません。

しかし、川島は三日前の物資調達の際、撃墜されてしまいました。補給を阻止する米軍機に攻撃を受けて、武装もままならないまま飛び立つた私たちは狙い撃ちされました。

私は草加だけを連れて蒼穹へ出ました。

ただ私の機体は、先日出撃した際に空気取り入れ口から弾丸の破片が入り込んで、エンジンの調子を崩していました。

「もう大丈夫か？」

整備兵に声をかけます。

「少し回転が不安定です」

「構わん、飛べればいい」

私は機体に乗り込んで風防を締めました。

砂埃の舞う滑走路を走り、操縦桿を押します。

後尾の下がつた状態で滑走する機体は、離陸の前に操縦桿を押して降下の体勢を作ります。すると、尾翼が上がって機体と路面が水平になるのです。

それから操縦桿を引き込むとグッと機体が浮き上がります。

スロットルを開けるとエンジンが一瞬息継ぎして、私は慌てて回転を少し絞り込みました。

少し飛ぶと、遠くに黒い点が見えました。当然大柄な爆撃機が先に目視に入ります。四機の編隊です。

護衛機はぴたりと傍に着くのではなくて、少し高い場所からこちらを覗っている事が多いので、私は草加を連れて高度を上げました。斎藤は既に部下を一人共失い、代わりの編成を組む人員はいなかつたので、私と共に飛びました。

無線なんて名ばかりで、機能しません。

私に並んだ斎藤が目配せで合図します。私はそれに答えるように機を前に出して翼を小さく振りました。

護衛の敵機が見えたのです。向こうはまだこひらに気付いていないのか、散開する様子がありません。

私たちは高度を上げて、彼らの死角から接近します。久しぶりに搭載した20ミリ弾は、私の闘志を奮い立たせました。

下方でパツと炎が上がるのが見えました。B-17に攻撃を開始したのです。護衛機はワイルドキャット六機とヘルキャットが四機見えました。

半分が降下を開始したので、私たちは残った五機に不意打ちで仕掛けました。

左の上方から20ミリと7・7ミリを同時に打ち込みます。

向こうは慌てて散開しましたが、その攻撃で一機が火を噴きました。

20ミリが装弾されていれば、風防を狙う必要がありません。旋回して残りに襲い掛かります。

部下の草加には決して離れぬように指示してありますから、斎藤と合わせて三機編隊が残りの敵機三機に襲いかかります。

数で劣る場合は、とにかく不意をつくにかぎります。まともに打ち合つては数には敵いません。

二十型から搭載された電影照準機に敵機が入りました。私は再び20ミリ機銃を一秒発射します。

パパパパッと胴体に穴が空いて尾翼が破損し、敵機はグルグルと回り黒煙に包まれながら落ちてゆきます。

周囲を見ると、同じように黒煙を噴いて落ちる機影が見えました。空戦中の蒼穹は蒼くはない……もちろん、晴れ渡る蒼穹は蒼いのですが、目に映るのは硝煙と黒煙と血にそまる灰褐色なのです。

それは戦闘が終わった瞬間に、雲の群れから出た時のようにパツと晴れて蒼く輝き、色彩は蘇えります。

灰褐色の景色の中で、私は視線を張り巡らせます。

残りの敵一機は、降下してB-17の援護に向きました。いや、単純に私たちから逃げたのかもしれません。

私たちはそれを追いました。

護衛機と応戦する仲間の姿が見えました。対空砲火を放つB 1 7の周りを、ゼロ戦がグルグルと舞っています。

まるで牛の顔に集まるハエのようです。

四機の大きな要塞が浮かんでいます。B 2 9に比べればB 1 7は大分小さいのですが、私たちの乗るゼロ戦に比べればやはり、要塞に見えるのです。

私は最後尾を飛ぶB 1 7を標的に決めて、後方から接近しました。

途中でヘルキャットが横から割り込んで来て機銃を放ってきたので、編隊は崩れましたが、私はそのまま標的に近づき20ミリ弾をしこたま打ち込みました。

正面から飛んでくる機銃掃射は比較的簡単に扱い潜れます。

弾道は引力の影響を受ける為、下方に弧を描きます。だから、正面に弾道が見える弾は機体の下へ下へ入つて行くのです。

怖いのは視界の隅から飛んでくる弾です。

正面以外の方向から飛んでくる弾に注意しながら、私は旋回して再度20ミリ弾をB 1 7のエンジン口がけて打ち込みました。

空中戦の視界は、戦後に見るテレビ映像のようにブレはありません。

あれはカメラが機体の振動を全て拾っている為で、人の目は振動を吸収補正します。

だから実際に見る空戦時の視界は、もっとスマートで幻想的で、弾幕は目の前を花火の欠片の様に緩やかに舞つて行きます。

私が放った機銃は、B 1 7の翼を横断するように命中しました。四つのうち片側一機のエンジンを失ったB 1 7はグングン高度を落として、雲の隙間から落ちるように海原に消えました。

それを見た他のB 1 7三機は旋回を始めました。

何時もと勝手が違う事に気付いたのでしき。残りの敵機も応戦してきます。

私は草加が心配で彼を探しましたが、見つけられませんでした。
離脱しようとするとB-17を追いました。斎藤は心配ないと思つたし、みんなぞれぞれに経験を積んでているので、今は田の前の敵機を一機でも多く撃墜しようと思いました。

編隊から離れた一機のB-17を追いました。

対空砲火が拡散する稻妻のように飛んできます。

私は右に回りこんで一番エンジンを狙いました。

一番エンジンが煙を吹いた時、20ミリ弾が底をつきました。

一度雲の中に入つて見失いかけましたが、雲からでて旋回すると再び機影を捉えることができました。

このまま逃がしてたまるかと思い、私はついつい深追いしていました。

気がつくとスタンレー山脈が視界に入りました。

私は追撃を止めませんでした。

しかし、7・7ミリ弾だけで爆撃機を落とすのは用意で無い事を知つていました。

機体を上昇させた時、スタンレー山脈の頂の上に三機の新しい機影を見つけました。

それが味方でないのは明らかでした。

私はこの日撃墜されました。

光の雨が、けたたましく私を襲いました。

雲の絨毯に潜りこんで回避を繰り返しましたが、三機の追撃から逃れる事は不可能でした。

無我夢中で森に不時着する事が出来た為、奇跡的に命は取り留めたのです。

周囲は山々に囲まれ、自分がポートモレスビー近辺の山間に落ちた事以外、何も判りませんでした。

空がやたら青くて、高く聳えるスタンレー山脈の頂きには白い雪が残っていました。

その上空に纏わり着く雲は、水に絵の具を垂らしたように渦巻いて滲んでいます。

脚と腕と腰を酷く痛めていましたが、とにかく場所を移動しなくてはなりません。

機体は木をなぎ倒してバラバラになつたのに、自分が助かつたのはほんとうに奇跡でした。

草の生い茂る地面に片手を着いて身体を起こした時、チリリリン……という鈴の音が聞こえました。

肌身離さず持っていた、昌美さんから貰つたお守りでした。

何時之間にか気にならなくなつた鈴の音が、急に聞こえたのは森の静けさか、自分の注意深さが増幅したからでしょうか。

彼女のくれたこのお守りが、私を守ってくれたのかも知れません。

久しぶりの野宿で、澄んだ夜空を見ました。
見慣れた月の模様が何故か違つていて、森の静けさ
は月影を遮つて深く黒く澄んでいました。

思つよつた距離を私は歩けませんでした。

一日間、私は微かな水音を頼りに森の中をさ迷い歩きました。
敵地が近いのは判つています。

幸い山脈が方位を示してくれました。私は山を越えずに撃墜され
たので、敵軍基地は聳える山の向こうだと判つています。

しかし、落ちたゼロ戦の探索に来る可能性は大きいので、私は常
に警戒していました。

田中は航空機の音に聴覚を尖らせて、時折遠くに見える敵機の機
影に身を屈めました。
怪我の為に体力の消耗が激しくて、長く歩く事が出来ませんでした。
た。

運よく川に辿り着くと、顔を川辺に突っ込んで水をガブ飲みしま
した。冷たい水は喉を潤し私の生命力を僅かながら蘇えらせました。
木の実やさのこなど、食べられそうな物はとりあえず口へ入れま
した。

生き残れる可能性は少ない事を知つていました。あと何日生きる
か知れない中で、とりあえず可能な限り生きようと思つました。
そうしなければ、生きる可能性は瞬く間にゼロになる事を予感し
たのです。

歩くたびに微かに鳴る鈴の音が、彼女の代わりにそつと示していた
気がしたのです。

腰が酷く痛んで、歩くのが苦痛でした。

脚が痛いのは引きずつて行けるが、腰を引きずつては歩けません。
何とか海へ出ようと、私は汐の香りを探しました。

川音を聞きながら、それでも川から離れて進みました。

敵の搜索隊が目をつけるのは、やはり川辺だと思ったからですが、
私が生きているとは思つていなかつという微かな安堵もありま
した。

そう思わなければ、怖くて森を歩く事は出来ませんでした。

立ち止まる度に空を仰きました。

そこは遠く果てしなく、数日前には自分のいた場所だとはどうてい思えません。

地に足を着く憂鬱……

翼を失った鳥は、きっとこんな気持ちで天を見つめるのでしょうか。

月は静かに沈黙し、星は零を落とす六日目の夜、私は焚き火もせずに闇に紛れて身体を休めていました。

遠くで聞いた事もない野鳥の声がします。野鳥かどうかも判らないのですが、そう決め込む事で闇の恐怖から逃れるのです。

人の気配でした。

微かに動物の鳴き声が響くだけの闇の帳は、生物の気配を逃しません。しかも、一足歩行の人間の気配は、森に潜む獣のそれとは違うのです。

私は闇の向こうに目を凝らしました。

月影が照らす森の景色は、透き通る海底のようです。ぶなの木が茂る蒼い闇を見つめて息を殺しました。

ガサガサツというシダを踏む音が、かなり近い位置で聞こえました。

直ぐ傍の雑木の影が揺れました。

私は草木の合間に細く身を屈めて、大地と同化することばかりを考えました。

大地となり、草木となれば自分の気配を消せると思つたのです。

「誰かいるか？」

囁きのような声がしました。

警戒のなかで溜まらず出したであらうその声に、私は聞き覚えがありました。なにより、日本語でした。

「斎藤か？」

私は微かに頭を上げました。チリリン……と、音が鳴ります。

「し、白土か？」

彼は鈴の音に反応して応えました。

私たちは微かな月明かりの元で再開しました。

斎藤は私より大分南で落ちたようですが、コンパスを無くして方位を見失っていました。

熱帯の生い茂る森は、場所によつては空も見えない為、スタンレー山脈が見えないのです。それ以前に、斎藤はあの山がスタンレー山脈だと氣付いていたながつたそうでした。

それにして二度の擊墜で生き残るとは、彼の強運には誠驚かされます。

翌朝、陽の出前に私たちは海を田指して歩き出しました。

しかし、軽傷の斎藤に対しても怪我はやはり深刻だつたようですが。

樹木とシダ植物が行く手を阻み、移動する為の疲労は予想以上でした。

斎藤と合流して二日目、私はついに動けなくなつてしましました。

「俺を置いてゆけ。俺はここにいる」

私は大きく横たわる木に寄りかかって斎藤に告げました。

やはり運命に抗う事はできません。ここで朽ちるのが自分の運命なのだと悟っていました。

「そんなことができるか。俺は貴様と一緒に帰るぞ」

斎藤は帰るといいました。

私は……ただ生きる為に歩いていました。

帰る氣など無かつたのかもしれません。

この森に落ちて朽ちるまで、ただ自分がどれだけ歩き続けられるかそれだけを貫いていたような気がします。

風に吹かれて揺れるだけの蓑虫は嫌だったのです。

「ああ、お前なら帰れる」

「貴様も帰るんだよ。俺と一緒にまたゼロ戦で飛ぶのだ」

齊藤が私の肩を掴みました。

どれだけのゼロ戦が本土に残っているのだろうか。

最後の補給を受けたラエ基地で、特別攻撃隊の話しへ話を聞きました。

『神風特別攻撃隊』です。

第一陣の徵集が行われたらしく、私たちも年明けには要請があるかもしれないと聞きました。

硫黄島が危なく、なんとしても上陸を死守しなければなりませんでした。硫黄島が落ちれば、本土空爆が激しくなるでしょう。

最終決戦に向けた準備が水面下で進められているのは判りましたが、私たちは日先の任務を^{まつと}全うするしかありません。

齊藤は再び戦闘機に乗つて、敵兵を殺したいのでしょうか。

私は自分自身の中に、そんな闘争心が無い事に気づいていました。殺す為に生き延び、生きている人を再び殺す……

なんと理不尽な行為なのでしょう……それに比べ、畠美さんの仕事はなんと人道的行為に満ち溢れているのでしょうか。

そんな彼女だからこそ……軍事国家である日本において非国民的言動と知つていながら私に言葉をかけたのです。

『どうか、無事に帰つて来て下さい……』

彼女の言葉、声が蘇えりました。

私はあの時返事をしませんでした。しなくてよかつたと思いまし
た。

それは非国民的な答えになる事にこだわったわけではありません。

ただ、それに応えるのが怖かったのです。

あなたの願いに応えられない時が来た時、約束を守れない自分が怖かったのです。

9・迷走の影（後書き）

お読み頂き有難う御座ります。
今しがまへりへ、お話は続きます。

「斎藤、これを持つてゆけ」

「チリリン……と微かに音が鳴ります。

私は横たわる木の幹に身体を擡げたまま、胸のポケットから昌美さんにもらった山吹色のお守りを取り出しました。

「これはきっとお前を守ってくれる。持つてゆけ」

「それはできん。それは、貴様の物だ」

「俺にはもう必要ない。持つてゆけ」

私は静かに笑いました。

昌美さんと交わした、あの静かな笑みでした。

旭日を受けて緋色に染まる蒼穹そらが、艶やかに深い緑の木々に溶け込んで生命の息吹を滲ませていました。

私たちは他の気配に気付きませんでした。

少しづつ田覚め始めた森の囀りに、別れを承諾させる最後の会話に夢中で、警戒を怠つてしまつたのです。

私の意識が朦朧としていたせいかもせんし、斎藤は私に気をとられていたのかもしれません。

「なら、これを昌美さんに返してくれ……思ひに応えられなかつたと伝えてくれ」

斎藤は、よつやく私の手からお守りを受け取りました。

それを強く握り締めて「わかつた。この約束は成し遂げてやる

「鈴の音に気をつけろよ」

私は再び声をかけると、誰にも見せた事のないよつな優しい笑みを浮かべました。

こんな時にこんなにも優しく笑える事に、私は驚きました。

これが、悟りというものなのでしょうか。

森の陰影が色濃くなつてきました。確かな陽射しが登り、地上を

照らし出した証です。

斎藤が静かに私から離れようとした時、周囲に人の気配を感じました。

同じく何かを感じた彼も、私の数メートル先で反射的に身を屈めます。

私は力を振り絞つて辺りの気配を探りました。

いる……何人かは判りませんが、かなり大勢がこの周囲を囲んでいるのがわかりました。

雑木の隙間から僅かに見える斎藤に、私は目配せしました。

……俺がお取りになる……だから、お前は行け。

生きて帰れ。

私は木の幹に寄りかかったまま、ズルズルと身体を起こして立ち上がろうとしました。

森の空気は静まり、不気味な人の気配だけが周囲を取り巻いていました。

何処から私の姿が見えているだろうか。

私は腰の痛みを堪えて木の幹に寄りかかり、無事な左腕を小さく上げました。

その時、チリリリン……と音が鳴ったのです。

不気味な静けさに、それは明らかな人工の音として響きました。ほんの小さな鈴の音が、まるで蒼天に抜けるほどはつきりと響いたのです。

銃声が三発轟きました。

その音に驚いたのか、バサバサと鳥が飛び立ち、辺りで草木が激しく揺れました。

私は、斎藤の頭が雑木に沈んでゆくのを微かに見ました。

何時の間にか私は木の幹の傍に倒れていて、斎藤の姿を確認する事は出来ませんでした。

しかし撃たれたのは私ではありません。

遠のく意識の中で、私は異国の言葉を耳にしました。

生い茂る木々の隙間から見える蒼穹は遠く、もう手が届かないの

だと思いました。

* * *

私は米軍に捕獲されて手当てを受けました。

一日後に目覚めた私は腰の怪我が酷く、治療には大分時間がかかりました。

年が明けると、私はポートモレスビーにある病院から、バリへ運ばれました。

その年の夏、戦争は終わりました。

私の記憶は、目の前で倒れた斎藤の姿で止まってしまいました。

人の記憶と言うのは不思議な物で、異国の敵兵に囮まれた過酷な捕虜生活よりも、斎藤にお守りを渡して別れを告げたあの瞬間の記憶の方が遙かに鮮明で、私の心から色あせる事が無いのです。

生きようとした彼は銃弾に倒れ、諦めた私は生き残りました。

私がお守りを渡さなければ、彼は生き残れたのだろうか。私の方

が死んでいたのでしょうか。

斎藤には妹と弟がいると聞いていました。

戦争とは理不尽の塊で、些細なボタンのかけ違いが運命を左右します。しかし私はその運命を恨んだり嘆いたりしませんでした。

私が飛び傍らで、幾つもの命が消えてゆく様を見ていたせいかも

しません。

あと数センチの差で撃墜された連中を、何人もこの目で見てきました。そしてそれは、敵機にも言える事なのです。

私が本土に帰ったのは、乾いてわざわざ立った風が吹き始める十月の終わりでした。

大空襲を受けた本土は、様変わりしていました。広島と長崎に原子爆弾が投下された事は、終戦後に知りました。

陸・海軍基地は米軍に引き渡されて、日本国軍は事実上の解体です。

東京に降り立つた時、私は途方に暮れました。

何処に行けばいいのか判りませんでした。

母親は東北の実家に疎開して、戻ってはいませんでした。私は母の元へ行こうと思いましたが、どうにも心にひつかることがありました。

内田昌美……彼女はどうしているだろう。本土空襲のさなか、彼女はどこで人命を救っていたのだろうか。

母親には手紙を書き、私は横須賀に向いました。あそこへ行けば何か判るかもしれないと思つたのです。

横須賀の海軍基地は米軍に引き渡されて駐留基地に変わっていました。

海軍病院は国立病院とされ、一般の診療を始めました。

私は内田昌美さんを探しました。

『どうか、無事に帰つて来て下さい……』彼女が言つた言葉。

帰つてきました。私は帰つてきました。

あの時私は答を返しませんでした。しかし、さよならの言葉も言いませんでした。

心のどこかで運命に抗い、再びあなたに逢う事を願つていたのかもしれません。

私は帰つて来ました。生きて帰つて来ました。

あなたのくれた、鈴の音のおかげで……

10・郷愁（後書き）

次回、最終話です。

11・じゅしひの果て（前書き）

最終話です。

『私』の想い出は完結します。

11・ともしびの果て

秋は確実に深まつていました。

焼け野原の東京には紅葉に茂る樹木さえ残しく、焦げて朽ち果てた並木の跡だけが点々と見えるだけでした。

それは瓦礫に埋もれ、よく見ないと見落とすほどです。

都心の国民学校は空爆の直撃を受け、生徒数百人と共に大地に没しました。学校のような大きな建物は、恰好の爆弾投下目標になつたに違ひありません。

それでも僅かな時間の経過と共に、人の息吹は蘇えり始めていました。

私は来る日も来る日も内田昌美という女性を探しました。

来る日も来る日も人の命を奪い、硝煙に塗れて飛んだ南海の暮らしを思えば、それは私にとつて貴いことでした。

私は彼女を探す為に生きました。

戻らない日々を想うより、閉ざされなかつた未来を私は見ていました。

彼女が見た未来に私も立つ事ができる。

それだけが私を支える朴訥^{ほくじつ}な想いだつたのです。

しかし私はふと考えてしまいます。

内田昌美などという女性は、本当は存在しないのではないかと。私が生き延びる為に想像した、私の中だけの幻だつたのではないかと。

斎藤に手渡したお守りは、母がくれたものだつたのではないかと考えて、記憶を辿つては彼女の白い温もりと、あの時の紅涙を思い出すのです。

私は蒼穹を飛びながら、幻想に苛まれていたのでしょうか。

そうでないのなら、何故昌美さんは見つからないのでしょうか。

私は自分の罪を打ち消す為に、人の命を救う憂いで莊明な女性を造り上げ、斎藤の死の責任を彼女のお守りに託したのでしょうか。

私は何時彼女と出会い、何時別れたのでしょうか。

どうせなら、私の目の前で灯火を消した斎藤も幻ならいいのに。いや、この戦争が幻だつたなら……

しかしそんなはずは無くて、この焼け野原の大地は全てを物語っています。

そして私は確かに戦火の蒼穹を飛び、彩雲を潜り抜け大地を見下ろし、引き金を引いたのです。

喝采も賞賛もない、輝くだけの蒼い虚空の中で……

その冬、私は雪の降る東北へ行きました。母が疎開したまま住み着いた山間の古い集落は、樹木が生い茂り平和に満ちていました。畑で採れる作物のおかげで食料には困らないらしく、寧ろ東京の人間より豊かな暮らしに映りました。

米兵の姿を一人も見かけない日本の風景が、私が母国にいることを強く指示し自覚を促しました。

子供たちが野原を駆け回り、雪面には多くの足跡がありました。父親は群馬の工場に住み着き、何れ母もそちらへ行く予定なのだと聞かされました。

当然のように私も一緒にと誘われましたが、私には使命があります。

それは既に、私の中で使命として個別の意志となっていたのです。冬の野良仕事は大変でしたが、腹いっぱいの食事と暖かい布団は一時の静養に私を留まらせるには充分でした。

白化粧を施す山々の静寂した風景は、決して暗たんとしたもので

はなくて寧ろ昌美さんの静かで清楚な姿を思い出させるのでした。キンと澄み渡る空気は、私の思いを遠く何処までも運んでくれるような気がしました。

雪だけが始まる頃、私は再び横須賀へ向いました。

再開した個人病院なども増えて、私は一軒一軒回つて昌美さんの消息を訊いて歩く日々を続けました。

しかし、彼女の消息は判らないままでした。

彼女の実家である世田谷の米問屋も探しましたが、焼け野原の東京でそんな事は無意味でした。

何時のか私は横浜の工場で働くようになつてそこに根を下ろし、月日だけが消えない想い出と共に時を刻みました。

米軍のGHQも撤退し、後に高度経済成長が日本を取り巻くと、戦後の復興は目まぐるしい勢いで発展を遂げました。

私は時の流れと共に人一人探すことに疲れ、私自身の人生を歩んでいました。

結婚はしませんでした。

新幹線が開通し、ジャンボ旅客機が上空を行き交つ国で、私は朽ち果てていきます。

それでも彼女の想い出は薄れる事はなく、最近はより鮮明に思い出すこともあります。

おそらく、今入院しているこの病院の匂いが彼女の香氣かおりと折り重なつてあの残像を蘇えらせるのでしきつ。

白衣に包まれた白く輝く月光のように静かに微笑む笑顔を。

「白土さん。今日からお隣りますよ」

朝の検温と血圧測定の場で、無邪気に笑みを浮かべる看護婦が言いました。

平和しか知らない幼さを残すこの娘の笑顔は、明るい代わりに深みと安らぎは無いように思えます。

それはきっと、私の偏見なのでしょうけれど。

昼になつて、ガタガタとストレッチャーが私のいる病室に運ばれてきました。

隣とは、私の隣のベッドと言つ事です。

四人部屋のこの病室には元々一人しかおらず、その一人は先週息を引き取りました。

隣人様は暫くカーテンで閉ざされていましたが、夕方になつて開きました。

毎日見るクリーム色の変わらぬ風景の中で、窓から入る僅かな風と人の動きだけが空気を揺らすのでした。

私は隣の女性患者を見ていました。

気配は感じていましたが、そちらに顔を向ける事は失礼千万だと思い、食事の時にでも挨拶を交わせばいいだろうと思つていました。廊下を歩く足音が、パタパタと部屋の前を横切つてゆきます。

「白土さん……じゃありませんか？」

不意に声がしました。

私は天井を見上げたままその声を幻聴だと思いました。

何故ならあまりにも間近から聞こえたその声は、長年私が捜し求めていた声に酷似していたから……

「失礼ですが、白土幸夫さんでは？」

再び声がしました。隣のベッドからでした。

ゆつくりとした、穏やかに静かで通る声です。いや、私にだけ通る声で聞こえたのかもしれません。

私は枕に頭を沈めたまま、ゆつくりと振り向きます。
身体を起こして咄嗟に振り返る動作は、今の私にはもう不可能なのです。

視線は天井からゆつくりと部屋の壁を滑り落ちて点滴パックが見えた後、隣のベッドへ到達しました。

彼女も首だけをこちらに向けて、静かな笑みを私に向けています。私の朽ち果てた顔をマジマジと見据えて彼女は

「帰つて来てくれたのですね」

その静かな笑みの顔^{かん}ばせの主が誰なのか、私にもひと目で判りました。

長い年月が彼女にも確かに年輪を刻ませてはいましたが、それは同じ時を刻んだ私には見えていなかつたのだと思います。

澄んだ眼差しと安堵を導く静かな笑みは、あの頃と何も変わつてしまません。

「はい……帰つてきました」

既に声は出せないはずの私の口が動き、確かに言葉を発しました。昌美さんは小さくゆつくりと枕の上で頷きました。

あの時と同じように紅涙の雫が一筋、彼女の瞳から零れ目尻を伝います。

窓からかに入る風が、西陽に照らされた白いカーテンをゆつくりと揺らし時間は静かに、私がゼロ戦に乗つていた時の10分の1ほどの速度で緩やかに流れていきました。

遠い日々の熱い風が、硝煙の匂いを脳裏に運んできます。

あの頃の記憶の中で硝煙の匂いは、消毒液の匂いと表裏一体なのです。

三日後、私は彼女に見取られています。

意識が遠くなる中で、視界には彼女の優しさに満ちた愁いな顔だけが映つていました。

家族のいない私には、見取つてくれる者などいないと思いました。しかしそれは、斎藤やあの時散つていった多くの仲間と同じなので、特に悲しくはありませんでした。

長い静養を終えた老兵が、ただ仲間のもとへと帰るだけです。

私は朽ち果てる最後の瞬間で、彼女を見つけることができたので

す。

彼女がどんな人生を歩んだのかは判りません。

誰も見舞いに来ない様子を見ると、もしかして昌美さんも一人だつたのかもしれないし、幸せに満ちた暮らしの終末、ご主人は先に亡くなっているのかもしれません。

そんな事はどうでもいいのです。

ただ見つめるだけの、水面に映る月のようなあの瞳の愁いは、私の帰りを待ち続けていたのだと思います。

彼女が握る私の手から、あの時と同じ冷たい安らぎが注ぎ込まれて、私はそれを感じるだけで充分に満たされるのです。

遠い日の回想が脳裏から薄れて灯火は小さく揺れ、細く静かに…三日月が息を潜めて山の向こうへ沈むようにゆっくりと、私は消えます。

私は、消えゆく光彩の中で再びあの音を聞きました。

生死を一瞬で分け隔てたあの音。

陽光の煌く熱帯の静けさを高々と駆け抜けた音。

スタンレー山脈の頂まで響いた、あの玲瓏なる鈴の音を。

了

11・じめじびの果て（後書き）

最後まで読んでいただき、ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3926e/>

スタンレーに響く

2010年10月8日15時10分発行